
生き方難民活動日記！

富崎ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生き方難民活動日記！

【Nコード】

N1424Z

【作者名】

富崎ヒロ

【あらすじ】

主人公・五十嵐新太はある悩みを持っていた。それは「自分の幸せが分からない」というものだった。晴れて高校生になった新太は新しいクラスで双子の天才少女と出会う。その双子は自分達を科学的思考にとらわれながらも「科学を否定し、科学に頼らない生き方」を模索している。「生き方難民」だと言った。そこから「新しい生き方」を目指す難民達の物語が始まるのであった。

序章

「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」

新太あらたがその問いに出会ったのは中学二年が終わろうとしている時だった。野球をしている時、サッカーをしている時、普通の人だったらそんな風に答えるだろう。本を読んでいる時、そんな答えもいかもしれない。毎日が幸せだ、というおめでたいやつもいるだろう。だが新太はそうではなかった。この問いが胸に深く刻まれた理由が新太にはあった。

新太にはこの問いの答えがなかった…。

この結論に至って新太はまさに言葉通りにその場から動けなかった。新太は別に毎日が不幸というわけではなかった。今まで可もなく不可もなく平々凡々と生きてきた。だからこそ、この問いに出会って今までの自分の人生が否定されたような感じがした。

それから新太は自分と同じ仲間がいないか一年かけて探し回った。自分に共感してくれる人が欲しかったのだ。「あなたは何をしている時が一番幸せですか？」そう聞いてまわった。しかしみんなこの問いの「答え」を持っていた。そして中学を卒業し、高校生となった。新しい環境での新しい生活。ここに問いの答えがあるはずだ、いや、きつと見つけてやる、そう信じて新太は決意を胸に門をくぐったのだった。

沢城高校理数科一年教室

そこに取り立てて目立つ特徴もなく、どちらかといえば暗い感じの

する男が、これまた取り立てて目立つとは言えない場所に座っていた。今日は新学期の初日。辺りを見渡すと知らない顔ばかり。新太は小さく溜息をついたあと、視線を窓の外に移した。

「ねえ君、名前なんていうの？」

いきなり声をかけられ動揺した新太は

「い、いがらしあらた。」と小さな声で答えた。

「五十嵐君、いやアラタでいいや。オレの名前は秋野シンジ。よろしく。いやー困ったよ、知り合いが全然いなくてさー。このままじゃぼっちになっちゃうと思うってたところに、いかにも話しかけてください的なオーラを醸し出してる人が見えたからさー。そんな所でじっとしてないでホームルームまで時間あるんだしさ、ちよつと学校の中見て回らない？」いきなりのことと虚を突かれ、（しかも勝手に身に覚えのないオーラまで出していることになってるし）どうしようか迷ったが、いい人そうだし何もすることが無かったので、まあいいか、と新太は渋々席を立ち秋野と共に教室を出た。

「この学校って頭良さそうな人ばかりだよな。オレみたいなやつは絶対ついていけないよ。特にオレ達のクラスにいる瀬戸内とか言う双子の女子。あの二人は凄いつていう噂だぜ。新入生テストでも一番と二番だったらしいしなー。」

教室を出て廊下の角を曲がりながら秋野が言った。廊下には他のクラスの前が溢れていたの二人はそれを避けながら他の一年教室の前を順に歩いてまわっていた。「そういえばオレ達のクラスの担任になる赤島っていうやつ面白くて面倒見のいい、いい先生だった。この学校怖い先生が多いらしいからよかったな。」

そろそろ一年教室を三分の一くらいまわり終える所だった。新太は一瞬あの質問を試してみようかとも考えたが、何だか場違いな気がして、結局

「秋野君はこの学校のこと詳しいんだね。」
と当たり前障りのない返事をしていた。

秋野はニツコリ笑って答えた。

「シンジでいいよ。オレもアラタって呼んでるし。この学校のこと
は同じ中学の先輩に聞いたんだ。別に詳しいわけじゃないよ。」

「そうだったんだ。」

新太は答えた。

「でも…」シンジはぼそつとつぶやいた。

「がっかりだったなあー。クラスの雰囲気は想像してたのと違うし、
せつかく高校から新しい自分に生まれ変わろうと思ってたのに、そ
んな勇氣もどっかいった。」

そしてシンジは続けた。

「自分が幸せになつていく姿が想像できないよー。」

新太は驚いた。類は友を呼ぶとはこのことだろうか。自分が一番聞
きたかったことを目の前にいる相手が言ってくれた。そして初めて
の仲間を見つけたと思えば新太は少し嬉しくなった。

「キーンコーンカーンコーン」

ちょうど一年教室を見終わつたところでチャイムがなった。

「やべっ、早く教室に戻らなきゃ。」

そうとうと新太とシンジは急いで教室に戻つた。

「それではホームルームを始めます。」

教壇に立った背の高いほっそりとした教師がそう言うのと教室は静ま
り返つた。

「えー、みなさんはじめまして。私はこのクラスの担任になつた赤
島といいます。年齢は秘密ですが、ちょうどあと一ヶ月で誕生日を
迎えます。プレゼントをくれる心優しい人が一人でもいると先生は
うれしいです。」

なるほど、これがシンジがさっき言っていた面白い先生か、と新太
は思った。受けを狙つたつもりだろうが、まだ学校に慣れていない
生徒たちの中で笑うものはいなかった。

コホン、と軽く咳をして赤島先生は続けた。

「えー、初めて顔を合わせる人も多いと思うので、まずは自己紹介から始めたいと思う。出席番号順に秋野から始めてくれ。」

先生から指名されシンジは席を立てて笑顔で言った。
「秋野シンジです。出身中学は南中です。色々と迷惑かけるかもしれないけど、よろしくお願ひしまーす。」

それから次々と自己紹介をして行きあつという間に自分の番になった。

「東中出身の五十嵐新太です。本を読むのが好きです。よろしくお願ひします。」

そういうと新太はすぐに椅子に座った。それから残りの人達が自己紹介をしている間はぼーっとしていたので、ほとんど聞かないままいつの間にか自己紹介が終わっていた。そのあとは先生から諸々の連絡、プリント配布があつたあと、みんなで体育館に移動するため新太たちは教室から出た。

体育館に行く途中でシンジが話しかけて来た。

「アラタって本を読むのが好きだったんだな。」

そういわれて新太はそういえば自己紹介の時そんなこと言ったなあと思ひ出した。本が好き、とは言つたが、あれは一種の定型句のようなもので、実際は他の人と読んでいる量はあまり変わらない。あでも言わないと、他に言うことが無かつたのだ。初対面の人たちに「自分と同じ種類の人間を探しています。」何て言えない。そもそも本が好きだったら、それがあの問いの答えになつている。

しかし、そんなことをいちいち答えるのはめんどくさかつたので新太は「まあね」とだけ答えておいた。

「それにしても、あんまりパツとしないやつばかりだったなあ。」
シンジは小さな声で言った。それは新太やシンジも同じだった。あんな簡単な自己紹介で自分をさらけ出す人はそうはいないと新太は思つた。類は友を呼ぶと言う言葉を信じて新太は少し期待していたが、自己紹介だけでは自分の仲間がいるかどうか判断できなかつた。

新太が少し残念な気持ちになっているとシンジは続けた。

「やっぱり瀬戸内っていう双子は違ったな。近寄り難い雰囲気って
いう感じ。絶対友達にはなれそうにない。」

自己紹介を聞いていなかったのでも言えなかったが、新太は
とりあえず「同感だ」と言っておいた。

体育館に着くと他のクラスは既に整列を終えていて、新太たちのク
ラスが並び終わると、まもなく式が始まった。既にそのありがたみ
を失った校長の言葉から始まり、無くてもいいんじゃないかと思う、
いろいろ面倒臭いことをしたあと、教室に戻り、その日は解散とな
った。色々と部活の勧誘があったが新太は全く興味がなく、そのま
ま学校をあとにした。

帰り道。そういえば今日からこの道が通学路になるんだ、と新太は
思った。同じ制服の人もちらほら見かける。新太は電車通学だつた
ので、駅に向かっていて。行き通ってみた時はそんなに複雑な感じ
はしなかったからすぐに慣れるだろうとか、近道とかあるんだろう
かとか思いながら新太はとぼとぼ歩いていた。特に変わった様子の
ない普通の道だ。あえて変だといえばさつき変わった名前の汚らし
い怪しい店があったくらいか。そのまま駅に着いた新太はちょうど
来た電車に乗った。

「扉、閉まります。」

そついうと電車は扉が閉まり、電車は動き出したのだった。

「あーあ、疲れた。」

新太はそついうとベッドに倒れ込んだ。今日はシンジと出会い、ほ
とんど一方的に話し掛けられたただけだけど、はじめて仲間（ら
しき人）を見つけた。クラスの雰囲気も何となくわかったし、これ
から楽しい学園生活が待っているといいな、と新太は思った。

「そーだ、明日から早速授業だった。予習終わらせなきゃ。」そつ

いうと新太は机に向かった。

そして新太はこれから自分の人生を大きく変える出会いをすることになるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1424z/>

生き方難民活動日記！

2011年12月5日00時53分発行